西田幾多郎と明治期の教育制度

鈴木康文

序

西田幾多郎（一八七〇―一九四五）は、明治三年に生まれ、日本の近代化とともに成長していった。その西田の伝記のいくつかを紐解いてみると、現代の我々にはすでに理解したり、実感として納得したりすることが難しくなっていることが多々ある。

たとえば、これはよく知られていることではあるが、実年齢と公的年齢に二歳のギャップがある(1)。そのため、勤務していた京都帝国大学の定年が早まり、実年齢五八歳で定年を迎えている。その理由は、師範学校に入学させるための父親の処置であったとのことである。

その他にも西田の学校歴・職業歴が紆余曲折しているため、その経歴には現在の我々からすると不可思議なことがある。その要因のひとつは、明治期の教育制度そのものが、西田の成長期とともに設立され、また大きく変化していったことによる。さらにはその制度が実際に定着するためにはそれなりの紆余曲折があったことが想像される。

そこで本稿は西田の経歴と当時の教育制度と照らし合わせて、その疑問を解明していくことにする。

そのために、まず簡単に西田の教育に関することに焦点をあてて、西田の学歴・職歴を簡単に辿ってみることにする。そして本稿で取り扱う西田の経歴問題を拾い出す（第一章）。それを踏まえて、次に明治期の教育制度がいかなるものか、どのように変革していったのかを簡単に見てみる（第二章）。以上を捉えた上で、あらためて西田が受けた明治の教育について考察し、西田の経歴から生じる疑問に答えることにする（第三章）。

本稿は西田の伝記から当時の教育を見るのではなく、当時の学校制度から西田のおかれた状況、あるいは岐路にたったときの選択肢を読み取る試みである。

第一章　西田の略歴

すでに周知のことであるが、簡単に西田の経歴を、とくにその学歴を辿ってみよう。

西田幾多郎は一八七〇年五月（明治三年）、石川県河北郡森村（現在は石川県かほく市）に父・得登（やすのり）、母・寅三（とさ）の間に生まれる。長男であり、上には姉正、尚、その後弟憑次郎が生まれる。特に姉の尚にはさまざまな影響をうけて育った。しかし、すでに述べたように、戸籍上の出生は一八六八年（明治元年、正しくは慶応四年）である。

一八八二年四月に小学校を卒業後、一八八三年七月石川師範学校に入学するものの、チフスのため一年休学し、さらに一八八四年十月にはそこを中退する。

そして一八八六年十月には石川県専門学校付属中学校第二級に入学する。これは、いわゆる旧制中学を受験するためとされる。その後、一八八七年九月に第四高等中学校予科に入学し、一八八八年七月に卒業、さらには本科に九月に入学するが、一八九〇年五月には中退を余儀なくされる。その後独学を目指すものの眼を患ったこともあって挫折し、東京の帝国大学文科大学哲学科選科に入学する。

一八九四年七月に選科を修了する。その後、石川県尋常中学校英語教諭に内定するもののそれが取り消される。その一年後に石川県能登尋常中学校七尾分校の教諭（分校主任）となる。一八九六年四月には、母校である第四高等学校にドイツ語嘱託講師となる（高等中学校の名称は、一八九四年「高等学校令」により高等学校と改称される）。ところがその一年後の五月に解雇される。ただ同年の九月には山口高等学校教務嘱託となる。

簡単に彼の学歴と職歴をみてみたが、ここでさまざまな疑問が浮かんでくる。まず実年齢と戸籍上の年齢がずれていること、小学校卒業後一年間のブランクがあること、さらには師範学校の入学であるが、師範学校とはそもそもどのような学校であるのだろうか。いわば年齢詐称までして入学した師範学校を中退し、石川県専門学校を受験しようとしたわけであるが、その違いはどのようなものだったのだろうか。またその後入学する第四高等中学校との違いはどのような点だろうか。また中退後の身の振り方として独学を目指すということも、いかなる理由でそのような選択を試みたのか、現在との大きな時代の差を感じる。

また彼が帝国大学の選科に入ったことはよく知られるが、当時の大学の社会的な意義や選科の位置づけなども確認する必要がある。また就職先の中学校教諭とはどのような社会的地位なのだろうか。さらには、第四高等学校退職後の再就職先が山口高等学校であるが、これはいわゆるナンバースクールではない高等学校である。

西田の受けた教育、さらには奉職先の教育機関は何度も変更し

ており、それは当時の学校教育制度が大きく変化したことが反映していると推測される。

そこで、次に明治期の学校制度がどのように変革していったのか、また学校教育それ自身が当時の社会においてどのように受け取られていたのかを考えたい。

第二章　明治期の学校制度

ここでは、明治期になってからの学校制度を簡単に紹介し、西田がその制度のなかでいかに自らの進路を選んでいったのかを見てみることとしよう(2)。

学制

明治になってからの学校制度は、まず一八七二年（明治五年）に「学制」が公布されることに始まる。この学制の趣旨はいわゆる「学制序文」に示されているが、「学問は身を立るの財本」と述べ、（国家のためではなく）己のために学を身につけ、そのためにこその学校教育であるとしている。またそれゆえ学費は（国家が負担するのではなく）親の負担によるべきとしている。この教育原理は、個人主義、実利主義といってよいだろう。それにより、江戸時代までの封建主義的な儒教的為政者の教育理念を否定し、平等を是とする新時代を目指すものであった。それは個の自律・自営の能力を養い、さらにはあくまでも実学に徹するものであった。

そのために、中央集権主義を徹底させ、学区制をひいた。また実際に教える内容であるが、欧米諸国の翻訳を用いることとなった。さらには、その財政的な裏付けは、授業料によるものと地域学区の住民負担に基づくものであった。

以上のような教育制度で出発したものの、さまざまな問題点を抱えることとなる。なにより、この新たな教育を教える教員が少ないことである。明治初期に実学に基づいたしかも翻訳書による教育は、当時の日本の地域の実情を考えれば、かなり遊離したものと思われる。さらには地域住民の財政的な負担が重く、それを支える基盤も乏しかった。

教育令

このような状況から、一八七九年（明治一二年）に「教育令」が公布される。これは、特に地域の実情にあわせた初等教育を目的とするもので、そのため従来の中央集権主義を改め、地方に行政上の権限をゆだねるものであった。たとえば、小学校の設置を自由にすることとなった。さらには就学義務年限も緩和や短縮が可能となった。正規の教育年限は八年であったものを、四年まで短縮可能とし、さらにその四年のうち就学義務を一六ヶ月以上とした。

しかしこうした改正は、大きな方向転換をしたため混乱を招き、また就学義務年限をあまりに緩和したために、小学校教育が衰退することとなる。

そこで一八八〇年に「改正教育令」が公布され、ふたたび教育行政が中央集権主義に転じる。さらには、個人主義的な方向から伝統への回帰がみられ、修身教育が施されるようになり、また教員に対しても儒教主義が求められるようになる。

学校令

一八八五年（明治一八年）には森有礼が初代文部大臣に就任する。そしてその森によって一八八六年（明治一九年）「学校令」（「帝国大学令」など）が公布される。これは再度地方分権主義をとる。

この学校令により、ようやくそれ以後の教育体系が整備され、いわばメインストリームが確立することになる。

まず小学校では六歳より四年間の修業、その後高等小学校には二年間、さらに尋常中学校は五年間、高等中学校は本科二年間、帝国大学三年間となる。この学校令により帝国大学およびその予備段階として高等中学校が設立されることなる。また高等中学校は、尋常中学校卒業を入学資格としたものの、別に予科（三年）がおくことができ、こちらのほうが発足時は主となった。西田もこの予科に入学したわけである。尋常中学校は各府県に設置される公立であり、それに対して高等中学校は文部省直轄であり、目的が異なるものであった。

高等中学校は、大学の予備門的位置づけであり、その卒業により帝大へは無試験で入学ができる特権的地位をもっていた。そこでは外国語を中心とした一般教養を重視する。これは欧米文化を移入することによって近代化を目指すことによる。まさに帝国大学では、高度の専門教育を施すことから外国語の習得が前提となっていた[3]。なお、高等中学校という名称であるが、一八九四年高等学校令が公布され、高等学校と改称される（本稿では両者を使い分けるが、場合によっては「高等（中）学校」と表記する）。いわゆる「旧制高校」である。また創立当時、帝国大学は一つしかなかったが、後に二番目の帝国大学として京都帝国大学が創立（一八九七年）することから、後に東京帝国大学と改称される。

さらに一八八七年には帝大卒には無試験任用特権が与えられることになる。すなわち帝国大学は高級官吏に無試験で登用される特権的な大学となる。

なお帝大とそれ以前の旧東京大学ではこの点でも大きな違いが見られる[4]。

旧東京大学は一八七七年（明治一〇年）、東京開成学校と東京医学校の合併により創立した。ただしこれは文部省所轄の大学校という位置づけにすぎず、その他の司法省、工部省なども独自の高等教育機関を有していた。そしてこの旧東京大学卒は下級官吏

待遇しか得られず、そのため他の大学校のほうが、当時の若者にとって魅力が大きかった。旧東京大学は、文部省所轄の諸学校の教員養成を目的として設立した学校にしかすぎなかった。

このように学校教育制度の整備とその後の官吏への接続というシステムが整ったが、しかし当時の社会教育においてはいくつか問題点を抱えることになる。そのひとつは尋常中学校のレベルが低すぎ、高等中学校への接続が機能しなかったのである。そのための方策として、先に述べたように高等中学校への入学（試験）のため、予科（課程）を三年、さらにはその前に補充過程を二年おくこととなったわけである(5)。

ここで初代文部大臣として学校令を公布した森有礼の教育政策について触れておこう。

森（一八四七―一八八九）は、青年期に英国、および米国に留学しており、その経歴を生かしてその後両国に外交官勤務を果たしている。明治初期には福沢諭吉らと明六社を結成し、『明六雑誌』（全四三号）を発行、啓蒙主義者として名をなした。

学校令の教育理念は、国家主義として忠君愛国の精神を養い、そのために身体の鍛錬として軍隊式教育を採用したとされる(6)。ただし、彼の啓蒙主義との連続性を重視して、彼の教育上の方向性は天皇への忠誠心を養うというよりは、欧米流の愛国心を養成することにあり、日本の国際的な地位向上をはかって欧米列強に匹敵する一等国を目指すという解釈もされる。そしてそれはまた教育に対する政治的中立と無宗教性を示すものであった(7)。ただどちらにしても森自身は薩摩藩出身であるものの、藩閥主義はとっていないと考えられる。

第三章　西田の学歴と職歴

以上簡単に西田の経歴を辿り、それが日本の教育制度変革に重なることは確認された。

ここで西田の伝記のなかでこの教育に関わる疑問について考察してみることにしよう。

実年齢の問題と師範学校

まず先に挙げたように、実年齢と公的年齢が二歳のギャップがあり、そのため京都帝国大学の定年（六〇歳）が早まることとなった。つまり実年齢五八歳で定年を迎えることになった。これは師範学校に入学するためと言われている(8)。すなわち父親が長男で跡取りである幾多郎が小学校卒業後、故郷にもどってこないことを憂慮して上級学校に進学することを反対した。そのとき、すでに師範学校に在籍していた姉が師範学校を薦め、それが受け入れられた。師範学校は小学校教員になるための学校であり、卒業後故郷に戻ることが期待されたからである。ただ当時の石川県師範学校の入学年齢は数えで一七歳以上（場合によっては一五歳以

上）とされていたため、年齢を書き改めたとされる。

しかしこの師範学校は、どのような学校であったのだろうか。とくになにゆえ小学校卒と連結していなかったのだろうか。西田も小学校卒業後、一年以上のギャップが生じている。天野によると、師範学校は小学校の現職教員の再教育が目的とされる、その意味では正規の学校教育体系からみると傍流のものであった(9)。明治期は、教育制度が形成される途上であるため、慢性的な教員不足が続いた。そのため小学校では、小学校の卒業生で優秀なものをそのまま小学校の非正規無資格の教員（代用教員など）にする場合が多かった。彼らに再教育をすることがこの学校の大きな目的であり、そのため師範学校は授業料を無料とし、推薦入学制度もあったが、卒業後は奉職する義務があった。

また当時の小学校教員はなるほど農村においては数少ない月給取りではあったが、社会的地位は低く、待遇も恵まれたものではなかった。そのため小学校教員は、無資格の者は資格を、またすでに一定の資格を有する者はさらにより上位の小学校教員資格を求めることになる（そしてより大きくは中学校教員の資格を目指すようになる）。

師範学校はそれゆえ、小学校とは直接連結していなかったのであり、西田が入学するにあたりその年齢に達していなかったわけである。

また西田が結局この師範学校を入学後、チフスのため休学することとなり、さらには中退する（家庭の事情で故郷にもどる必要がなくなったことも一因である）(10)。

石川専門学校と第四高等中学校

西田はその後県のエリート校をめざし石川県専門学校付属中学校に入学する。そしてその卒業後、高等中学校予科に入学・卒業する。そして本科には一八八八年に入学をはたす。この専門学校は、一八八一年（明治一四年）それは法・理・文の三学科をもつ学校として構想された。それはあくまでも石川県の人材養成のために創設され、国家の人材育成の予備門的位置づけでもなかった。ましては士族救済を目的としたものでもなかった(11)。実際にこの専門学校卒業者は、大半が県内にとどまっている。

西田は、専門学校付属中学校を卒業後、石川専門学校から改称された第四高等中学校に予科に入学する。一年後予科を卒業、本科入学、しかしその二年後には中退することとなる。

専門学校から第四高等中学校に改称され、国家の直接管理に置かれたその時期に西田はその場に居合わせたことになるが、「校風が一変した」（全集一二、二四七）との感想をもらしている。それ以前は、どちらかというと家族的な雰囲気に包まれていた学校が「規則ずくめの武断的な」場になった。これは高等中学校があくまでも大学への予備門の位置づけであり、（県ではなく）国家の人材を育成する場に変容したことが主因であろう。森有礼は

第四高等中学校での開校式において祝辞・演説を述べているが、それによれば教育の目的を、国家の指導者を養成し、それをとおしての国家独立を現実のものとすることであった。森自身は藩閥を中心に教育行政を推し進めたわけではなかったかもしれないが、実際の学校行政では、藩閥的色彩が強いものとなっている。森が薩摩藩である上に校長は薩摩出身、幹事、舎監も薩摩出身であった。また加賀藩は佐幕ではなかったものの、維新に対して大藩であるにもかかわらずその役割を果たさなかった。さらには大久保暗殺者が旧加賀藩であったこともあり、両者には埋めがたい溝が横たわっていた(12)。

そのためもあって西田はその方向性に反発、行状点不足で翌年落第する。学校の雰囲気についても抵抗、英語教員への学力不足への批判、さらには（森が導入した）兵式体操への嫌悪が重なったとされる(13)。文科から理科に転科するものの結局退学することなる。

退学後の独学

退学後は、最初独学を目指すものの、目をわずらいそれを断念することとなる。しかし、ここでそもそも独学を可能と思ったのはなぜだろうか。

当時はまだ学問が学校のなかだけにあるものではないとする学問観が十分に生きていたと思われる。天野の商人教育に関する概説での記述だが、書物を読み、同行の士と文通することによって対話し、さらには師を求めて学をなすことがその道を究めることであった(14)。おそらく金沢の地はそのような学問観がなお色濃く残っていたと推察される。西田にとってはその手本ともいうべき存在が、師範学校入学前に師事した漢学者の井口濟（いのくちせい）とその門下三宅小太郎であったろう。三宅小太郎は師範学校の教員であり、西田もその生徒であったが、生まれは茶屋の次男であった。

天野が示した例から、考古学者鳥居龍蔵（一八七〇―一九五三）と植物学者の牧野富太郎（一八六二―一九五七）を挙げておこう。鳥居は国内外のフィールドワークや日本石器時代のアイヌ説で著名である。煙草屋問屋の息子であり、小学校のみの卒業で、それ以後はすべて独学をして一流の学者になる。また牧野は酒造業の息子で小学校卒業のみであった。裕福な商家のため学歴を必要とせず、その後独学で学を究める。ただし両者とも一流の学者であるものの学歴がないため晩年は不遇であった。

西田にとっても学歴と学問を切り離し、学歴にとらわれない学問観は十分に身近なものであったと推察できよう。

なお、天野は明治期の学問観および学歴観について、家業から三種類に分類している(15)。ひとつは旧士族、農民、さらには商人である。旧士族は学歴によって社会的に高い地位を得たいわば第一世代ともいえる存在で、西田が生涯師とした北条時敬がその典

型といえよう。彼は加賀藩士の次男として生まれ、官立である旧東京大学を卒業後、四校教員となる。西田が四校を中退するときなど、それを押しとどめようとしたりしているが、学歴社会成立過程とその一翼を担っていたからに他ならない。

平民としての農民（さらには商人）については、ある程度の読み書きそろばんができれば、それ以上の学問を必要としないとされた。そこで明治初期の教師は、士族出身者が多かった。身分と職を失った彼らは城下町を離れ農村の小学校教員になっていった。士族出身の教員が教育による立身出世、教育がいわば投資になることを明示した（西田の場合は家が大地主の出であり、一般の農民以上の教育の必要性と、金沢の地という特殊事情もあるが）。そして、学校が地域社会の秩序とは異なり、その学業と成果によってそこから脱する開けた制度を示していた。

また商家については、先に述べたように学歴はその仕事にとっては無縁なもの、さらには家業にとって逆に邪魔なものとされていた。それゆえ学校を介さず独学で学を究めようとする気風を残し続けたわけである。ただ新たな流れとして、慶應義塾のように、いわば実学を介して人格形成（自主独立）を目的とする方向も支持された。商家を核とする富裕層が、学歴も資格も必要としない、近代的な素養を、人間関係の中から修養する学校を求めるようになっていく。

西田は独学を一旦は目指したものの、目を患ったこともあってそれを断念し、上京したうえで、帝国大学の選科入学をめざすことになる。

帝国大学選科

高等（中）学校卒業者は、無試験で帝国大学本科に入学する資格を得た。西田は中退したためその資格を持たなかった。それゆえ選科入学をめざすところとなるが、しかし選科入学のためには検定試験が課せられた。そのことは選科が現在の大学の聴講制度とは異なることを示している（なお当時は選科生が、さらに試験を合格することによって本科生になる道もあったが、西田はその道に進んでいない）。

西田はこの選科生にかんしては「小生如き浪人」（全集一八、一〇）や「人生の落伍者」（全集一二、一七〇）になったように感じるとも記している。しかしこれは同じ第四高等中学校出身者で（彼とは異なり）卒業後、本科生になった同級生との比較からでた言葉であって、文字通りに解するべきではないだろう。後に友人である金田良吉、鈴木大拙の両名が一九八二年に選科に入学しており、西田にとって選科は学ぶに値するものであったからこそ勧めたと推察できる。

帝国大学での本科と選科の間にはいくつもの壁があったことは事実である。たとえば、図書館利用について、本科生が優先され、選科生は閲覧室ではなく、廊下に並べてあった机を使用して

いた。ただ当時本科生が八人、選科生が一九人という数字からするとそれなりの優先処置は避けられなかったともいえる(16)。しかし、選科、本科についてはいわばその内側（在校生、卒業生）からの差別意識はぬぐいがたいものがあったと思われる。

竹内によると、大正時代とかなり時代が下がってからの話になるが、帝大でも、本科生は旧制高校出身者、選科生は師範学校卒、検定合格者であり、旧制高校のいわゆる教養が、帝大の学識を支えているとみなされていたとのことである(17)。

就職

しかし、選科修了といっても（外の）社会においてそのことが大きく差を生み出すことはなかったといえる。たとえば、西田は選科修了後、一年後ではあるが、新設の石川県尋常中学校七尾分校教諭（主任）になっている。なお金田は京都府尋常中学校教諭に、また帝大国文科卒で第四高等中学校同級生の藤岡作太郎は京都真宗中学校教諭になっている（時代は下がって一九二〇年（大正九年）だが、中学校教員に占める帝大卒はおよそ三割弱である）(18)。

当時の中学校教諭の社会的地位は、小学校の教諭と比較してもきわめて高いものであった(19)。これもすこし後の講談社創設者・野間清治は群馬県一八七八年（明治一一年）生まれで、一八歳のときに小学校の代用教員（東京遊学帰りという経歴付）、その後師範学校卒業、さらに教員養成所を卒業し沖縄中学校の教員になっている。その給料であるが、小学校代用教員月額六円（普通の代用小学校教員は三―四円）、師範学校卒業後、母校の小学校訓導となって月額一六円、その後の沖縄中学校では月額四〇円であった。また中学校教員はいわば地元の名士との関わりができ、官民の尊敬を受ける職となった。これは夏目漱石の小説『坊ちゃん』の主人公からも伺えることである。ちなみに西田の月給は四五円で、ドイツ語の原書が購入可能な金額であった。

西田は、その後七尾中学校の教員では十分研究成果が生み出せないとして、母校である第四高等学校に転任する。しかしながら、学校内のトラブルに巻き込まれ、解雇されることなる。ただその後は、恩師北条時敬により、山口高等学校教務嘱託、さらに教授となる。

このいわゆるナンバースクールではない山口高等学校とはいかなる学校だったのだろうか。

山口高等（中）学校

山口高等中学校は、第一から第五の高等中学校と同じく、一八八六年（明治一九年）に設置された（より正確には山口中学校を山口高等中学校に改組）。山口と同様の高等中学校としては鹿児島高等中学造士館がある。ナンバースクールが官立であったのに対して、山口高等中学校は、寄付によって運営されたつまりは私

立であるが、管理は文部大臣であり、官立校と同様の扱いを受けた[20]。ただし、裁量権もあり、入学者選抜にたいして特例的処置も認められた。すなわち地元の学力優秀者を無試験で入学させ、さらにその学生を無試験で帝国大学に入学させることが可能だった。

その恩恵を受けた著名な研究者として河上肇が挙げられる。河上は尋常小学校から予備門の学校、山口高等学校、帝大まで無試験で入学した。ナンバースクールが難しくなっている時期に一九〇〇年までの地元入学率は五〇パーセントを超える。このような学校が設立されたのは竹内や天野が指摘するように藩閥のサバイバル戦略であり、藩閥から学閥へという時代の転換を長州藩閥が見通したものである。本来は森有礼が述べたように、高等中学校は地方に設立しているがあくまでも国家にとっての人材育成学校であった。しかしそれを逆手にとって、高等中学校を介して地方の「地縁主義」を存続させる戦略であった。

しかし、このような地域に特化しまた閉鎖的な事態は、さまざまな弊害をもたらす。一八九三年に学生のストライキ（寄宿舎騒動）が起き、関わった学生の多くが除名処分をうける（約二〇〇名）などで知れ渡る[21]。そしてそれの収拾にあたったひとりが北条時敬であった。最初は教頭としてその後は校長として、山口高等学校を軌道に乗せ、そのとき解雇処分をうけていた弟子の西田を招聘したわけである。

結

本稿は、西田の学校歴と明治期の教育制度とを照らし合わせてみてみた。西田は、明治期の黎明期にあって、教育制度とその運用によっていわば振り回されたことになる。またそのこともあって多くの挫折を味わった。ただしかし、当時の時代においては、それが典型的であったともいえ、本稿で触れた鳥居や牧野との比較からすると、彼の学歴と師弟関係がその後の人生に大きい意義と影響を与えたといえよう。

註

西田幾多郎全集（第二版）からの引用は、本文中に巻数とページ数を示した。

(1) 遊佐道子『伝記 西田幾多郎（西田哲学選集別巻一）』燈影舎、一九九八年、三三五頁。なお、西田の伝記については以下も参照した。武田篤司『西田幾多郎』中央公論社、一九七九年。小林敏明『西田幾多郎の憂鬱』岩波書店、二〇〇三年。上田閑照『西田幾多郎とは誰か』岩波現代文庫、二〇〇二年。

(2) この第二章は、主に仲・伊藤編『日本近代教育小史』福村出版、一九八四年による。

(3) 天野郁夫『学歴の社会史―教育と日本の近代』平凡社ライブラリー、二〇〇五年、一一六頁。
(4) 竹内洋『学歴貴族の栄光と挫折（日本の近代第12巻）』中央公論新社、一九九九年、六一-六四頁。
(5) 秦郁彦『旧制高校物語』文春新書、二〇〇三年、六〇頁。
(6) 仲・伊藤編、前掲書、六四頁。
(7) 犬塚孝明『森有礼』（人物叢書）、吉川弘文館、一九八六年、二八〇-二八二頁。
(8) 遊佐、前掲書、一七頁。竹田、前掲書、六九頁。
(9) 天野、前掲書、二三二頁。
(10) 遊佐、前掲書、一八頁。
(11) 天野、前掲書、三七頁。
(12) 竹田、前掲書、九五頁。
(13) なお、第四高等中学校で、西田らに英語を教授して、その学識について批判された本間六郎であるが、（旧）東京大学卒後、石川専門学校教員となり、歴史、理財学、地理を受け持つかたわら英語も教えた（竹田、前掲書、一一七頁）。英語の専門教員ではなかったわけで、当時の教員不足が伺える。
(14) 天野、前掲書、八七頁。
(15) 天野、前掲書、第三章・第五章。ただし、野村正實は、学歴主義を論じるにあたって次の二点を明示している。ひとつは学歴主義が浸透していったのは、一九六〇年代後半ということである（天野は昭和初期としているが）。野村は、自らの義務教育時代の経験（いわゆる団塊世代）を述べつつ、高専、工業高校、商業高校などの職業高校が、「手に職」をつけることを目的として、その時代までは学力優秀な生徒を確保することが可能であったことをその理由としてあげている（もし彼らの中に学歴主義が内面化していたなら、大学をめざしていたはずである）。もうひとつは、学歴主義と立身出世論とは別のものであると指摘している。立身出世論は、学歴を問わず自分の所属する共同体のなかでの出世の意味、心情、その方法を述べたもので、両者を融合させて論じるようになったのは一九八〇年頃からである。野村正實『学歴主義と労働社会―高度成長と自営業の衰退がもたらしたもの』ミネルヴァ書房、二〇一四年、第一章および第二章。
(16) 福田和也「西田の虚、九鬼の空」、『日本人の目玉』ちくま学芸文庫、二〇〇五年、七九頁。
(17) 竹内、前掲書、七八-八〇頁。
(18) 竹内、前掲書、七三頁。
(19) 天野、前掲書、二三七頁。
(20) 竹内、前掲書、五五頁。天野、前掲書、二一頁。
(21) 秦、前掲書、六五頁。

で講演した内容に加筆訂正したものである。

（すずき・こうぶん　石川工業高等専門学校・一般教育科教授）

参考文献

浅羽通明『ナショナリズム―名著でたどる日本思想入門』ちくま新書、二〇〇四年。
天野郁夫編『学歴主義の社会史―丹波篠山にみる近代教育と生活世界』有信堂、一九九一年。
天野郁夫『増補　試験の社会史』平凡社ライブラリー、二〇〇七年。
坂本多加雄『明治国家の建設一八七一―一八九〇（日本の近代第2巻）』中央公論社、一九九八年。
鹿野政直『近代日本思想案内』岩波文庫、一九九九年。
竹内洋『立志・苦学・出世――受験生の社会史』講談社現代新書、一九九一年。
寺崎昌夫『東京大学の歴史―大学制度の先駆け』講談社学術文庫、二〇〇七年。
松野修『近代日本の公民教育―教科書の中の自由・法・競争』名古屋大学出版会、一九九七年。
安丸良夫『日本の近代化と民衆思想』平凡社ライブラリー、一九九九年。

本稿は、石川県西田幾多郎記念哲学館において県民大学校西田幾多郎哲学講座で「西田幾多郎が学んだ明治の教育制度」の題目

年表　西田幾多郎の学歴・職歴と教育制度

西暦　(和暦)	西田幾多郎の学歴と職歴	教育制度
1870.5　(明3)	父得登、母寅三の長男として生まれる	
	戸籍上の出生は、1868年（明治元年、正しくは慶応4年）	
1872.9　(明5)		学制公布
1879.9　(明12)		教育令公布
1880.9　(明13)		改正教育令公布
1882.4　(明15)	小学校卒業	
1883.7　(明16)	石川師範学校入学（チフスのため一年休学）	
1884.10 (明17)	中退	
1885.12 (明18)		森有礼、初代文部大臣に就任
1886.3　(明19)		学校令（帝国大学令など）公布
		東京大学を帝国大学に改組
1886.9　(明19)	石川県専門学校付属中学校第二級入学	
1886.11 (明19)		文部省、山口中学校を山口高等中学校に改組
1887.4　(明20)		第四高等学校を金沢に設置
1887.7　(明20)	卒業	帝大卒に無試験任用特権
1887.9　(明20)	第四高等中学校予科入学	
1888.7　(明21)	卒業	
1888.9　(明21)	第四高等中学校本科入学	
1890.5　(明23)	中退	
1891.9　(明24)	帝国大学文科大学哲学科選科入学	
1894.7　(明27)	修了（石川県尋常中学英語教諭内定取り消し）	
1895.4　(明28)	石川県能登尋常中学校七尾分校教諭	
1896.4　(明29)	第四高等学校ドイツ語嘱託講師	
1897.5　(明30)	第四高等学校を解雇	
1897.9　(明30)	山口高等学校教務嘱託	

出典：遊佐（1998）および竹内（1999）から引用編集